

無言館の思い出

塚田 實

八月二十六日から三十日まで日経新聞夕刊「こころの玉手箱」欄に窪島誠一郎氏のエッセイが掲載され、約十年前のことを懐かしく思い出した。

大学時代の友人K君は、定年になると実家のある佐久に戻った。ほどなく奥様を亡くしたので、一人で寂しいだろうと、元気づけるため二〇一四年四月末の二日間、佐久にかけた。一日目は鯉料理に舌鼓を打ちながら酒を飲み、二日目K君は「どうしても案内したいところがある」と車で上田市にある「無言館」に案内してくれた。

無言館は「戦没画学生慰霊美術館」で、館主窪島誠一郎と画家野見山暁治の努力で建設された。野見山が「東京美術学校（東美・現東京藝術大学）を卒業後応召したものの、自分は病気で日本に戻り戦争を生き抜いたが、先の大戦で亡くなった多くの画学生の絵を鎮魂のため収集したい」と話し、二人で全国の東美出身で戦没した画学生の絵を収集し、美術館の建設にこぎつけた。

教会風の建物の中に入ると、学生達の力強い自画像、恋人や妻の裸婦像、家族や故郷の風景などの絵が展示されている。静かに絵と向き合っていると、絵は無言で心に迫り、眺めているとついつい涙ぐむ。気がつくとき約二時間経っていた。外に出ると重苦しい雰囲気とは異なり、満開の桜が咲いていた。

その後、窪島・野見山両氏の話を直接聞いたことがある。

二〇一五年二月、窪島誠一郎氏が世田谷美術館の美術講座で講演をした。彼の生い立ちの話から、野見山と全国の戦没画学生の遺族を巡った収集活動での苦労を力強く語った。私設美術館建設にかける情熱には心を打たれた。

六ヶ月後の八月、今度は野見山暁治氏が講演した。氏は当時九十四歳だったが、自身の絵やエッセイ創作活動の歩み、無言館建設への思いなど語り、高齢にもかかわらず湧き出るエネルギーには感心した。残念ながら昨年六月一〇二歳で亡くなった。

無言館は将来に備えて、今年六月女優兼エッセイストの内田也哉子ややかこを共同館主に選んだ。